

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00110

研究課題名(和文) 中世諏訪の神仏習合史における「諏訪流神道」の研究

研究課題名(英文) Research on "Suwa-ryu Shinto" in the History of Buddhist-Shinto Interactions of Medieval Suwa

研究代表者

岩澤 知子 (Iwasawa, Tomoko)

麗澤大学・国際学部・教授

研究者番号：60748375

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世諏訪に生まれた「諏訪流神道」の最重要文献『諏訪大明神深秘御本事大事』の解読を通して、以下のことを明らかにした。(1) 神長・守矢満実の主導によって構築された「諏訪流神道」には、同時代に中央で普及していた両部神道の秘説・儀礼が数多く取り入れられていることが証明された。(2) それと同時に、両部神道とは異なる諏訪古来のカミを祀る独自の儀礼や行法が存在していた事実も明らかとなった。中でも、両部神道が展開した「胎内五位論」を、固有の宗教風土に基づく死生観・生命観の表現へとさらに変化させていった諏訪独自の思想(諏訪流の胎生学的思想)が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、中世の諏訪祭政体における神長・守矢満実が著した『諏訪大明神深秘御本事大事』の解読に注力した結果、今まで中央政治体制に近い「伊勢流」などの神道流派でのみ観察・分析されてきた「両部神道」の儀礼/行法が、中央から遠く離れた信濃国諏訪においても「諏訪流神道」として相承されていたことが明らかとなり、中世諏訪における神仏習合の内実の解明に大きく貢献することとなった。さらに新たな課題として、諏訪流神道と両部神道との類似性とどまらず、両部神道とは異なる独自の神仏習合儀礼/行法(例えば「諏訪流の胎生学的思想」)を生み出していった諏訪の文化的背景を探究する必要性が浮かび上がってきた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to elucidate the rich historicity and diversity of how the ancient Japanese kami worship created multifaceted images of divinity through interactions with Buddhism and various other beliefs. As part of this historical verification, the study focused on "Suwa-ryu Shinto," which emerged in medieval Suwa. The study focused on analyzing "Suwa Daimyojin Shinpi Go-Honji Daiji," the main text of "Suwa-ryu Shinto." The decoding of this text revealed that many esoteric teachings and rituals of Ryobu Shinto, prevalent in the central region at the time, were incorporated into the "Suwa-ryu Shinto." At the same time, it also became clear that there were unique rituals and practices for worshipping the ancient Suwa kami, especially the theory of "Five Stages of Gestation," a meditation technique developed based on "embryological thought," which reflected the acceptance of Ryobu Shinto's teachings while further transforming them into Suwa's unique view of life.

研究分野：思想史

キーワード：諏訪流神道 神仏習合 密教 灌頂儀礼 胎生学 神信仰 胎内五位論

1. 研究開始当初の背景

現在、日本宗教史、中でも神道史の分野では、「神道とは何か」という問いの解明が、一つの重要な課題とされている。従来の神道観が、神道とは日本に連綿と続く固有信仰であり、経典のない自然と調和した日本人の民族性を体現する「超歴史的信仰」であると主張する、ある種の「原理主義的・排他的傾向」を孕みがちだったのに対し、近年の神道研究の発展は、この議論に新たな光を投じ、神道はあくまでも、古代・中世・近世・近代の時代ごとに異なる相貌を呈してきた「歴史的形成物」であることを明らかにしてきた。しかし、ではこの「神道」の成立を、歴史上のどのあたりに具体的に見出すかという点については、未だ異論が多く合意には至っていない。というのも、そもそも「神道」をどのように定義するかによって、その成立時期をいつと見なすかは変わってくるからである。たとえば、「神道」を祭祀中心の宗教と考える立場は、古代律令制下における神祇祭祀制度の創設をもってその始まりと見なす「古代説」を主張するのに対し、「神道」をあくまでも日本人のアイデンティティ形成に関わる概念的イデオロギーと見なす立場は、中世に登場した伊勢神道や吉田神道が、仏教との差別化を図ることによって新たな「神道」概念を形成していった時期こそが始まりだとする「中世説」を主張する。こうして近年、「神道とは何か」という大問は、「歴史としての神道」という共通理解を踏まえた上で、さらにその「神道」をどう定義するか、そしてそれによって、「神道」の成立を歴史上のどのあたりに見出すかという、より詳細な議論に焦点を移しつつある。

この神道の定義をめぐる議論の中で未だ見落とされていたのは、古代説が主張する（「ヤマト朝廷によって確立された）神祇制度」を神道の始まりと考えた場合、ではヤマト朝廷成立以前からこの列島に存在したさまざまな「カミ信仰」は、いったいどのように定義されるべきなのか。この「カミ信仰」と「神祇制度」は、いかに関係し合い、共存を可能にしてきたのか。いや、その平和的に見える「共存」の裏には、実は激しい対立や抗争を経たうえでの発展があったのか、などといった疑問であった。この点に関し、たとえば Mark Teeuwen（オスロ大学教授）は、中世説が主張する ①概念的イデオロギーとしての「神道」と、古代説が主張する ②古代律令制により確立された「神祇制度」に加え、③神祇制度の枠に必ずしも収まりきれない、列島のあちこちに古来存在する多様な「カミ信仰」という新たな概念を導入することを提案し、この三つの領域を明確に区別したうえで議論を進めるべきだと主張している（Mark Teeuwen, “From Jindo to Shinto,” in *Japanese Journal of Religious Studies* 29/3-4: 256）。この三つの領域 - 「神道」と「神祇制度」と「カミ信仰」 - は、日本の長い歴史の中で互いに影響しつつも、それぞれが独自の要素を孕みながら変容をとげてきた。この三領域の違いを明確化し、それらの「相補的」とあると同時に「固有」の変容を探究することにより、我々は日本の「カミ（神）」をめぐる信仰がもつ、より豊かな歴史性や多様性を明らかにすることができるであろう。本研究は、Teeuwen が提案するこの視点を踏まえた上で、日本の「カミ信仰」がもつ歴史性と多様性を探ることを目的とし、その研究対象として「諏訪信仰」（長野県）を取り上げた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本古来の「カミ信仰」が、「神祇制度」、さらに中世における「仏教」との交渉を通して、いかに多義的な神の姿を創出するに至ったか、その豊かな歴史性や多様性を明らかにすることであった。本研究では、その歴史的事実の一つとして、中世の諏訪に

において生み出された「諏訪流神道」を取り上げた。これまでの中世神道の研究では、中世における神仏習合の実態を解明すべく、神道と仏教との関係性が議論されてきた。しかし、この「神道」という言葉の中には、上述したように、「カミ信仰」「神祇制度」「神道」という三つの異なる概念が混在しており、したがって今後の中世神道研究においてはさらに、これら三要素の差異を踏まえた上で、それぞれの相互関係ならびに、それら三要素と仏教との関係を探究することが重要になってくる。本研究が取り上げた「中世の諏訪流神道」は、このうちの「カミ信仰」「神祇制度」「仏教（真言密教）」の三要素が歴史的に複雑に絡み合って生まれたケースとして、中世神道研究の深化に新たな思考材料を与えてくれるものである。

3. 研究の方法

まず前提として、諏訪流神道には、以下のような独自性が見出される。

- ① 中世の諏訪祭政体には「双分的首長制」（＝古代から一切の宗教的儀礼を司るシャーマンとしての「神長」と、律令時代以降に君臨する諏訪国の象徴・諏訪大明神の現人神と見なされた「大祝」の二大首長制）が存在していたことが知られているが、これは諏訪古来の「カミ信仰」と、ヤマト朝廷によって確立された「神祇制度」との重層性を象徴するものと考えられる。
- ② 「諏訪流神道」は、中世の神仏習合の産物として生まれた信仰体系とこれまで説明されてきたが、より正確に諏訪の歴史を踏まえるならば、その創生に寄与したのは、「大祝（＝神祇制度の象徴）」ではなく、「神長（＝カミ信仰の象徴）」の守矢満実であったことがわかる。すなわち、「諏訪流神道」の形成過程とその構造の分析を通して明らかになるのは、単に「神道」と「仏教」の習合の歴史というにとどまらず、より詳細な「カミ信仰」「神祇制度」「仏教」の三要素が織りなす相克と共存の歴史であるということである。

したがって中世の諏訪祭政体の構造分析を通して明らかになってくるのは、日本の中央政治体制から遠く離れた諏訪という地方において、「カミ信仰（神長）」「神祇制度（大祝）」「仏教（真言密教）」の三要素が、互いにどのような影響を及ぼし合いながら諏訪祭政体を作り上げるに至ったのか、その信仰の重層的構造（相克と共存の歴史）である。本研究では、その重層的構造を探るべく、以下の手順で研究を進めた。

- (1) 「神長」と「大祝」の関係性の解明を目指し、諏訪信仰における儀礼の構造分析を中心に文献・史料研究を行った。これまでの中世諏訪信仰の研究が、一般によく知られた『諏訪大明神画詞』（編纂・諏訪円忠）や『神道集』（中世神話）など、おもに「大祝」側の文献・史料の分析を中心に進められてきたのに対し、本研究はさらに一步を進め、諏訪祭政体の双分的構造において「神長」が果たした宗教的役割を明らかにすべく、神長・守矢満実が著した諏訪流神道に関わる文献・史料の解読に焦点をあてた。ここで分析対象としたのは、神長官守矢家に残された以下の史料である。
 - ① 守矢満実『諏訪大明神深秘御本事大事』（室町期）
 - ② 守矢満実『神長守矢満実書留』（室町期）
 - ③ 上記以外に「諏訪大社上社神長官守矢家文書」に収められた室町期の史料として、『年内神事次第旧記』、『大祝職位伝授書』、『物忌令』など、ほか多数。
- (2) 神長・守矢満実が興した諏訪流神道の中に、さらに真言密教がどのように取り入れられていったのか、その歴史的経緯と構造の解明を目指し、史料分析を行った。ここで分析対象としたのは、中世後期以降、諏訪における真言宗の灌頂道場・談義所であった佛法紹隆寺（長野県諏訪市）を始めとする寺院に残された神仏習合に関する史料である。中世諏訪に

は、醍醐寺系の小野流・真言密教が伝えられたことがわかっている。本研究では、諏訪祭政体における「カミ信仰」と「神祇制度」の重層的構造の分析を踏まえ、さらにこの祭政体が「真言密教」といかに結びついていったのか、その融合の歴史と宗教史的意味を明らかにしていった。

4. 研究成果

日本では、中世に広まった神仏習合のもと、15世紀初め頃より真言密教の神祇に関する秘説・儀礼を相承する神道流派が現れる。真福寺蔵『神祇秘記』（16C 中頃の成立）によれば、この神道流派（十二流）の中には、両部神道の系列に属する「伊勢流」などに並び、「諏訪流神道」が存在したことが記されている。本研究では、2019-23年度の科研を通して、これまで日本宗教史および神道史の立場から分析されることのなかった「諏訪流神道」の分析に初めて着手し、中世の諏訪祭政体、およびその信仰の重層的構造の解明に取り組んできた。その結果、「諏訪流神道」には、以下のような独自性が見出されることが明らかとなった。

- ① 中世の諏訪祭政体には「双分的首長制」が存在していたことが知られているが、これは諏訪古来の「カミ信仰」と、ヤマト政権によって確立された「神祇制度」との重層性を象徴するものと考えられる。
- ② 「諏訪流神道」は、中世の神仏習合の産物として生まれた信仰体系とこれまで説明されてきたが、より正確に諏訪の歴史を踏まえるならば、その創生に寄与したのは、「大祝（＝神祇制度の象徴）」ではなく、「神長（＝カミ信仰の象徴）」の守矢満実であったことが、本研究により明らかとなった。これまでの中世諏訪信仰の研究が、おもに「大祝」側の文献・史料の分析を中心に進められてきたのに対し、本研究は諏訪祭政体の双分的構造において「神長」が果たした宗教的役割を明らかにすべく、神長・守矢満実が著した「諏訪流神道」の最重要文献：『諏訪大明神深秘御本事大事』（室町期）の解読に焦点をあててきた。その解読の結果、今まで中央政治体制に近い「伊勢流」などの神道流派でのみ観察・分析されてきた「両部神道」の儀礼/行法が、中央から遠く離れた信濃国諏訪においても「諏訪流神道」として相承されていたことが明らかとなり、中世諏訪における神仏習合の内実の解明に大きく貢献することとなった。この研究成果については、2022年10月に長野県諏訪市において「諏訪胎蔵会・公開シンポジウム」を2回にわたり開催し、またその模様をYouTubeでも同時中継し（現在も配信中）、広く一般に公開した。さらに、その講演録を出版すべく、現在、制作を進めている。
- ③ このように、神長・守矢満実の主導によって構築された「諏訪流神道」には、同時代に中央で普及していた両部神道の秘説・儀礼が数多く取り入れられていることが証明されたのだが、それと同時に、両部神道とは異なる諏訪古来のカミを祀る独自の儀礼や行法が存在していた事実も明らかになってきた。その儀礼/行法の中でも、本研究が特に注目したのが、「胎生学的思想」に基づき、人間の魂の成長を図る瞑想技法として生み出された「胎内五位論」である。本研究ではこれまで、諏訪流神道のバイブルとも言える『諏訪大明神深秘御本事大事』に示された胎生学的思想の解読に焦点をあて、両部神道が展開した「胎内五位論」との類似性をそこに見出すことに傾注してきた。ところが、この一連の研究の中で本研究ではさらなる史料の発見、すなわち、両部神道とは異なる独自の「胎内五位論」が中世諏訪に存在したことを示しうる新たな古文書（諏訪の密教寺院・佛法紹隆寺の末寺である無量寺が所蔵）の発見に至ったのである。本研究のさらなる発展として、2023年夏

より、その史料分析を開始している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 岩澤 知子
2. 発表標題 「宗教」から読み解く日本文化の可能性
3. 学会等名 比較文明学会 創立40周年記念出版シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tomoko Iwasawa
2. 発表標題 The Japanese Kami and the Concept of Evil
3. 学会等名 Global Philosophy of Religion Project Conference, University of Birmingham with Waseda University（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩澤 知子
2. 発表標題 中世日本の神仏習合と「諏訪流神道」
3. 学会等名 諏訪神仏プロジェクト
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩澤 知子
2. 発表標題 諏訪流神道における「胎生学」的思想
3. 学会等名 諏訪神仏プロジェクト
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomoko IWASAWA
2. 発表標題 Ritual Embryology in the Medieval Suwa-ryu Shinto
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies, (Section) Religion & Religious Thought (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩澤知子
2. 発表標題 「大蛇」をめぐる神話的思考
3. 学会等名 齋宮セミナー：神話と口承（野宮神社（京都市）主催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩澤知子
2. 発表標題 中世諏訪の神仏習合「諏訪流神道」における胎生学的思想
3. 学会等名 第39回比較文明学会大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Edited by Albino Barrera and Roy C. Amore	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 722
3. 書名 The Oxford Handbook of Religion and Economic Ethics ("Chapter 12: Shinto Economic Ethics" by Tomoko Iwasawa)	

1. 著者名 比較文明学会創立40周年記念出版編集委員会 編集	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東海教育研究所	5. 総ページ数 501
3. 書名 人類と文明のゆくえー危機に挑戦する比較文明学（第一部・第四章「宗教から読み解く日本文化の可能性」岩澤知子）	

1. 著者名 Edited by Michael Pye	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 327
3. 書名 Exploring Shinto ("Chapter 6: Buddhist-Shinto syncretization at the medieval Suwa Shrine" by Tomoko Iwasawa)	

1. 著者名 Edited by Bret W. Davis	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 814
3. 書名 The Oxford Handbook of Japanese Philosophy ("Chapter 2: Philosophical Implications of Shinto" by Tomoko Iwasawa)	

1. 著者名 三宅善信 編集	4. 発行年 2019年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 139
3. 書名 第21回国際神道セミナー「讓位儀礼と大嘗祭」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

諏訪胎蔵会 第1回公開シンポジウム「諏訪大明神、降臨すー中世諏訪における密教と神の出会いー」
https://www.youtube.com/watch?v=s-NE0_V36zE&t=17s
諏訪胎蔵会 第2回公開シンポジウム「『諏訪胎生学』ー中世諏訪と縄文をつなぐ『大地・子宮』の思想ー」
<https://www.youtube.com/watch?v=p27j0r0i7M&t=31s>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------